

## M.プレトリーウス「音楽家に対する指導」

— 翻訳 —

栗栖 由美子\*

【要旨】 本稿は、M.プレトリーウスの『音楽大全』第3巻、第3部、第9章 (P.229～P.240) における「音楽家に対する指導」を翻訳したものである。プレトリーウスは、1602年、G.カッチーニにより出版された『新音楽』の序文を手本として、イタリアの優れた歌唱法を『音楽大全』に記し、いち早くドイツに広めた。その大部分は装飾法に関する記述であるが、当時の声楽作品を歌う際に、心得ておかなければならない点を端的に述べている。

【キーワード】 M.プレトリーウス 音楽大全 G.カッチーニ

### I はじめに

バロック時代の声楽作品が、当時の劇場、宮廷、教会でどのように響いていたのか、どのように演奏されていたのかという疑問は、演奏がその場限りのものであること、また、バロック時代にあった歌唱技術の伝統がひとたび途絶えたことを考えると、おのずとわいてくる。そして、今日の活発なバロック音楽の演奏は、楽器を含む演奏形態すべてが、様式にかなった形で演奏されようとしているので、声楽演奏もそれに調和する演奏法、すなわち、当時の歌唱技法の獲得とその水準に肉迫するという使命を負わされているのである。

フィレンツェのカメラータの一員でもあったカッチーニ<sup>1)</sup>は、独唱マドリガーレとアリア集『Le nuove musiche 新音楽』<sup>2)</sup>の序文に、モノディー（通奏低音付き朗唱的独唱歌曲）様式における歌唱法を記述しているが、それまでに、歌唱法に関して、これほど明確にまた詳細に書かれた書物はなかった。ここに翻訳した、プレトリーウス Michael Praetorius (1571 od. 1572～73, od. 1569～1621) の『Syntagma Musicum 音楽大全』<sup>3)</sup>の中の「音楽家に対する指導」は、著者自身が本文中でも述べているように、カッチーニの『新音楽』の序文を手本に、ドイツにおける声楽の初心者に対して、基本的な歌唱法を示したものである。2人の記述は、実践的であるとは言い難いが、楽器のような、物として伝わる資料をもたない、バロック時代の歌唱法を研究する者にとっては、その演奏法や様式を知る上で大切な歴史的資料となりうる。

プレトリーウスの歌唱法に関する記述は、手本としたカッチーニのそれと比べると、分量的にかなり少なくなっており、特に重要な装飾法、声楽家の心得に焦点をあてているが、カッチ

---

平成21年6月1日受理

\*くりす・ゆみこ 大分大学教育福祉科学部声楽研究室

一ニの歌唱理論を凝縮したものとなっている。それは、プレトーリウスが、この後さらに詳しい歌唱法に関する論文を出版すると約束していることによるものであろう。

また、イタリアの歌唱法を、ドイツ語によって祖国に広めようとしたことは、当時のドイツの声楽作品を歌う際にも、その歌唱法が有効であったと推察することができる。よって、シュッツ (Heinrich Schütz 1585~1672) やシャイン (Johann Hermann Schein 1586~1630)、シャイト (Samuel Scheidt 1587~1654) らの声楽作品を演奏する時の道標ともなりうる。

『新音楽』の序文に関しては、佐竹淳氏の翻訳<sup>4)</sup>が存在するが、『新音楽』の序文を手本としてプレトーリウスが記述した「音楽家に対する指導」の翻訳はまだ見ない。そこで本稿では、プレトーリウスが、イタリアで確立された最先端の歌唱法のどのような部分を、ドイツに導入しようとしたのかを明らかにするために「音楽家に対する指導」の翻訳を試みる。

なお、翻訳においては、以下のような記載方法を取り、原文は本稿末尾に掲載している。

- ① 翻訳の中で使用する ( ) は、プレトーリウス自身が使用しているものであり、[ ] は、訳者が補足のために設けたものである。
- ② 原文におけるソプラノ記号で書かれた楽譜はト音記号に、数字で書かれた音符は現代の音価に直す。また、譜例においてミスと思われる個所には、小節の上に\*印を付ける。(譜例の番号は、訳者が便宜上付けたものであるが、譜例 15 における 1~14 の数字は、プレトーリウス自身が付けたものである。)
- ③ プレトーリウスによって書かれた楽譜の中のコメントは、イタリック体で示す。

## II 『音楽大全』について

プレトーリウス(1571年2月15日あるいは1572年~73年、または1569年アイゼナッハ近郊のクロイツブルク・アン・デア・ヴェラ生、1621年2月15日ヴォルフエンビュッテル没)は、作曲家、音楽理論家、オルガニストとして、多面的な音楽活動をした人物である。

プレトーリウスの音楽理論家としての功績は、全3巻に及ぶこの『音楽大全』を著したことにあると言える。音楽理論とその実践に関して体系的にまとめた『音楽大全』は、史上最古の音楽百科事典と称せられている。

第1巻は、ヴォルフエンビュッテルとヴィッテンベルクで、1614年から1615年にかけて出版されており、宗教音楽の歴史とその諸原則、また世俗音楽の歴史について述べている。《オルガノグラフィア De Organographia》と題された第2巻は、ヴォルフエンビュッテルにおいて、1618年と1619年に出版された。それは、付録として1620年にヴォルフエンビュッテルで出版された図版集《楽器総覧 Theatrum instrumentorum》とともに、過去からその当時にわたって知られるすべての楽器を取り上げ、その特性と演奏法を記述している。特にオルガンに関しては、詳細な情報を満載している。さらに1618年、1619年、ヴォルフエンビュッテルで出版された第3巻では、プレトーリウスの時代における様々な音楽形式や記譜法、複合唱の書法、あらゆる手法に基づくコンチェルトなどについて述べているとともに、P.199からP.224にかけては、プレトーリウス自身による作品リスト(それまでに完成していた全作品と計画中のもの)も掲載されている。「音楽家に対する指導」は、この第3巻の最後に収められている。

第1巻が出版された1614年から2年間を、プレトーリウスはドレスデンで過ごしているが、この時期にシュッツと知り合うことによって、イタリアの最先端の音楽に触れたことは、その

後の音楽作品だけでなく、著作においても大きな変化をもたらすことになった。彼が、著作にかなりの時間を割くようになったのもちょうどこの頃からであり、その成果として、音楽のあらゆる側面を実践に組み込み、その実践を通して得た知識を集約したのが、この『音楽大全』である。

### Ⅲ 「音楽家に対する指導」の翻訳

#### 第9章

(原文 P. 229)

#### 音楽家に対する指導

とりわけ歌を喜んで歌おうとする少年たちに、今日のイタリアの手法をいかに教えるべきかについて

演説者の仕事が、美しく優雅で、生き生きとした言葉と、素晴らしいフィグーラ〔言い回し〕で演説を飾るだけでなく、しっかりと発音し、声を高めたり、低めたり、時には大きな柔らかい声で、時にはもてるかぎりの声を十分に使って、アフェクト〔情緒〕を動かすことであるように、音楽家の仕事も、ただ歌うだけではなく、技巧的に優美に歌わなければならない。それによって、聴き手の心に触れるものがあり、アフェクトがゆり動かされて、そもそも歌が作られ目指す目的が達せられるのである。だから歌手は、生まれつき良い声をもつだけでなく、音楽についてのすぐれた理解と完全な知識を身に付けていなければならない。つまり歌手は、アツェントゥス<sup>5)</sup>を上手に良い趣味で使い、こぶし〔装飾的な節回し〕、あるいはコロラトゥーラ（イタリア人はパッサッジと呼ぶ）を、楽曲のどこでも使うのではなく、しかるべき場所で、しかるべき節度をもって使い、声の美しさだけでなく、技術が聴き取れるようにしなければならない。だから、天性ことのほか美しいヴィブラートのかかった声に恵まれ、装飾音唱法に適した丸やかな喉をもってはいても、音楽家の守るべき掟を守らず、ただ休みなくやたらコロラトゥーラを付けて、楽曲の中でそうあるべき限界を踏み越え、すっかり曲を台無しにしてしまって、何を歌っているのか、テキストはもちろん、（楽曲の最良の装いと優美さを与えるために作曲家が付けた）〔肝心の〕音符も聴き取れず、まして理解できないというような歌い方をする人は、一向に褒めたものではない。

こういう間違ったやり方は（一部の器楽奏者もそれに染まっているが）、聴く人、特に芸術にいくらか知識のある人の心を捉えたり、楽しませたりはできない。それどころかむしろ、うんざりさせ眠気を誘う。だから、作曲家が楽曲に与えた本来の力と優美さが、そのような装飾唱法のデフォルメによって奪われてしまわないよう、誰もが歌詞や文章を正確に理解できるように、すべての歌手達は若い時から〔生徒のうちから〕発声と明確な発音についてしっかり練習し、身に付けることがたいへん大切である。

それでは、どういう具合にして今日のイタリア風の歌唱法に習熟し、アツェントゥスとアフェクトを表現し、トリッロ、グルッポ、その他のコロラトゥーラを最も適切に用いることができるか。それについては、近いうちに神の扶助を得て別の小論を著すつもりである。（それについて、特に私の役に立ったのは、ローマのジュリオ・カッチーニとも呼ばれるジュリオ・ローマーノの『新音楽』の記述と、ジョヴァンニ・バッティスタ・ボヴィチェッリ<sup>6)</sup>であった。）

優雅で正しく美しい歌唱法には、他の様々な技芸についてもそうであるが、素質、技巧または教則、及び実習の3つが必要である。

### 1. 素質 NATURA

(原文 P. 231)

まず歌手は、天性からの声をもっていなければならない。それについて、3つの要件と3つの欠陥がある。

その要件とは以下のことである。第1に歌手は美しく優美にヴィブラートのかかった声、(ただし、一部の学校の生徒がよくやるような歌い方ではなく、立派にコントロールされた声)と装飾唱法に適した滑らかで丸やかな喉をもたなければならない。第2に、何度も息を継がず、しっかりと長く息を保てなければならない。第3に、カントゥス、アルト、テノールなどのどれかの声部を選び、それをファルセット(半分の無理に出す声)ではなく、声量のある明るい響きで保てなければならない。

なお、ここでイントナツィオとエクスクラマツィオについて述べておかなければならない。

#### イントナツィオ INTONATIO

イントナツィオとは曲のはじめ方である。それについては様々な意見があり、ある人は音符の通りと言い、ある人は音符の2度下から始めて徐々に上昇して声を上げていくと言い、また別の人は3度と言い、4度と言う。またある人は、快い柔らかい声で始めるべきだと言う。このような様々な手法は、大抵の場合はアッチェントゥスの名のもとに含まれる。

#### エクスクラマツィオ EXCLAMATIO

エクスクラマツィオはまさにアフェクトを動かすための手段であり、声を強めることによって行われる。そしてすべての2分音符と4分音符から付点つきで下行する場合に用いることができる。そうすると、やや詰まった感じになる次の音符が、全音符1つの場合よりもずっとアフェクトをゆり動かす。全音符は、エクスクラマツィオなしで、声のクレッシェンドとデクレッシェンドを伴うことが多く、またその方が優美である。そのことについては、前に述べた書物で詳しく実例を伴って説明することにする。

(原文 P. 232)

声を出す場合の欠陥とは、気ぜわしく呼吸したり、やたらと息継ぎをすること。鼻声で歌ったり、喉に息を詰めて歌うこと、また歯を食いしばって歌うことである。今述べたことは、とても褒められたものではなく、ハーモニーをゆがめ、不快にしまう。

ここまでは素質についてで、これからは教則について。

### 2. 教則 DOCTRINA

第2に歌手は、ディミヌーツィオ(また一般的にコロラトゥーラとも呼ばれる)を美しく適切に演奏する正しい知識をもっていなければならない。

ディミヌーツィオとは、大きめの音符がたくさん速い小さな音符に分割されることを言う。これには、様々な種類と手法があり、1つは音が順次進行で動くもので、アッチェントゥス、トレモロ、グルッピ、ティラータがそうである。

アッチェントゥスとは、音符が次のように喉で引き延ばされることである。



## 譜例 7 : 4 度の下行



## 譜例 8 : 5 度の上行



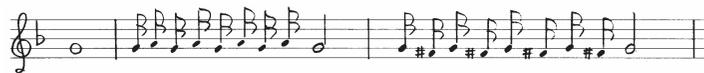
## 譜例 9 : 5 度の下行 他の変化する上行音型を伴う



(原文 P. 235)

トレモロあるいはトレムーロは、ある音符上で声をふるわせることにほかならない。オルガニストは、それをモルダントまたはモルデラントと呼ぶ。

## 譜例 10 : 上行のトレムーロ 下行のトレムーロ



この下行トレムーロより、上行の方が良い。

## 譜例 11 : トレモレットイ



なお、これは人の声よりオルガンやチェンバロ類に向いている。

(原文 P. 236)

グルッポすなわちグルッピは、カデンツや終止で用いられる。トレモロよりも鋭く演奏されなければならない。

## 譜例 12 :



ティラータは、長く速い順次進行の走句で、鍵盤上を上へ下へと走る。

## 譜例 13 :



この走句は速く鋭く演奏されればされるほど、いっそう素晴らしく優美になるが、個々の音符がちゃんと聴こえ、ほとんど聴き分けられるように演奏すべきである。

(原文 P. 237)

順次進行にはよらない ディミヌーツィオは、トリッロとパッサッジである。

トリッロには2種類ある。第1はユニゾンによるもので、線上または線間で、多数の速やかな音符が続けて反復される。

## 譜例 14 :



このやり方は、クラウディオ・モンテヴェルディ [の作品] の中に見出される。

第2のトリッロには、いろいろなやり方がある。トリッロを正しく演奏することは、書かれたものから学ぶことは不可能で、先生の実際の声と教えによって、歌って手本を示してもらい、ちょうど鳥どうしが教えあうように、口うつしで覚えるほかない。だから、私は目下のところは、前に触れたジュリオ・カッチーニ以外には、イタリアの著者の中でこの種のトリッロについて書いたものがなく、ただ、トリッロを演奏すべき音符の上に t, あるいは tr, tri, などと記されていることについて触れているだけである。しかし、ここについてながらいくつかの種

類を挙げて、まだ良く知らない初心者が、トリッロとはおおよそどのようなものか分かるように例を示しておこう。

譜例 15 :

(原文 P. 240)

パッサッジ Passaggi <sup>8)</sup>

パッサッジとはすばやい走句で、ある長さをもつ音符の上で、順次進行と跳躍進行の両方で、あらゆる音程を通して、上行および下行形で用いられる。

それには2つの種類があり、あるものはミニマあるいはセミミニマで、またはミニマ・セミミニマの両方を使って作られる。また、あるものは、短い音価に細分されるもので、フーサ、あるいはセミフーサで、またはフーサ・セミフーサの両方を使って作られる（セミミニマはイタリア人によってクロマータと、フーサはセミクロマータと、セミフーサはビスクロマータと呼ばれている。）

初心者はパッサッジを歌うときの技を、まず素朴で簡単な走句からはじめ、次第に短い音価に細分され、フーサをふんだんに使ったものを勤勉に練習し、最終的にはセミフーサをマスタ

一して完全に演奏できるようにするべきである。

### 3. 実習 EXERCITATIO

今まで簡単に述べてきたことを、より一層分かるためには、あらゆる種類のディミヌーツィオの例を実際に挙げなければならない（そこにはディミヌーツィオの手法が表記され、ある音符やある音程がどんな具合に細分されコロラトゥーラで飾られるかが見てとれるように）。

しかし、問題が広すぎてこの本では抱えきれないので、心ある音楽家、歌手は、指導と模範を載せた詳しい別冊の論文を、神の手を借りて近々出版できるまで、我慢してくださいように。新しい方法に従って歌おうとする心ある音楽家には、その本を参照して下さるようお願いいたします。

それまで、どうぞお元気で。好意ある心ある音楽家が、私のことを引き続き温かく思ってくださいることを期待し、そのような方に、私も命ある限り、力を尽くしてお仕えるように努めます。

ミヒャエル・プレトリーウス・クロイツブルゲンシス

## IV おわりに

本稿では、プレトリーウスの『音楽大全』第3巻、第3部、第9章「音楽家に対する指導」の翻訳を試みた。その記述は、ほとんどが装飾法と声楽家の心得に焦点をあてたものであるが、自由に装飾を施すモノディー様式の音楽を演奏する上で、当時の慣習をふまえた、演奏家が守るべき教えを端的に述べている。

演奏の伝統がひとたび途絶えたバロック時代の声楽曲を、正しい認識をもって歌うためには、その時代に書かれた歌唱理論書に頼らざるを得ない。現代の演奏家には、当時の歌唱理論書をひもとき、それを解釈し、演奏にどう生かすかが求められている。

なお、「音楽家に対する指導」に対する注釈、カッチーニとの比較に関しては、次の機会に論じる予定である。

最後に、この翻訳において、東京芸術大学名誉教授である服部幸三先生には、その細部にわたってご教示いただき、感謝申し上げます。

### 注および参考文献

- 1) Giulio Caccini (1546 頃～1618), 歌手, 作曲家。歌詞を明瞭かつ自由に朗唱することを目指し、言葉の意味やアクセントに従って装飾を付けるという歌い方を提唱した。
- 2) Giulio Caccini, *Le nuove musiche*. Firenze, 1602.
- 3) Michael Praetorius, *Syntagma Musicum*. 3 vols : *Syntagmatis musici tomus primus* (Wittenberg and Wolfenbüttel, 1614-15/R1959). *Syntagmatis musici tomus secundus* (Wolfenbüttel, 1618, 2/1619/R1958) ; with *Theatrum instrumentorum* (Wolfenbüttel, 1620/R1958). *Syntagmatis musici tomus tertius* (Wolfenbüttel, 1618, 2/1619/R1958).
- 4) 佐竹淳「G.カッチーニの『レ・ヌオーヴェ・ムージケ』(1602年)序文 翻訳と注」国立音楽大学音楽研究所年報第6集, 1985年.
- 5) 装飾音の名称。

- 6) Giovanni Battista Bovicelli (1592~94年活躍)。イタリアの音楽理論家、歌手。著作には、『マドリガーレとモテットの即興装飾法 Regole, passaggi di musica, madrigali et motetti passeggiati』Venezia, 1594. R1957. がある。
- 7) 翻訳の譜例では、32分音符で示した。
- 8) プレトーリウスが付けた見出しである。

## M. Praetorius ‘Instructio pro Symphoniacis’

— A Translation into Japanese —

KURISU, Yumiko

### Abstract

In this paper, I translated ‘Instructio pro Symphoniacis’ (from “Syntagma Musicum” by Michael Praetorius, chap.9, Part III, vol. III) into Japanese. Praetorius described this chapter inspired by the preface of “Le nuove musiche” published by G. Caccini in 1602. He mentioned of excellent Italian singing methods in German. That helped these methods spread in Germany in a short time. Most of ‘Instructio pro Symphoniacis’ is a description about ornamenting methods. Each of the comments in the chapter is concise and to the point. Even today, ‘Instructio pro Symphoniacis’ is very useful and helpful for us because we get the essential knowledge through this chapter when we sing vocal music works of those days.

【Key words】 M. Praetorius, Syntagma Musicum, G. Caccini

den Stimm/ auch einem runden Hals vnd Orgel zum diminuiren begabet / sich an der Musicoꝝ leges nicht binden lassen / sondern nur fort vnd fort / mit ihrem allzuviel coloriren, die im Gesang vorgeschriebene limites vberstretten / vnd denselben dermaßen verderben vnd verbunckeln / das man nicht weiß was sie singen / Auch weder den Text noch die Noten ( so der Componist gesetzt / vnd dem Gesange die beste Zier vnd gratiam giebt) vernemen / viel weiniger verstehen kan.

Welche böse Art dann / (deren sich sonderlich auch eislische Instrumentisten angewohnet) die Auditores, sonderlich die der Kunst etwas wissenschaftlich tragen / wenig afficiret vnd ertusset / ja vielmehr verdrossen vnd schläffrig machet. Derowegen damit dem Gesange seine naturalis vis vnd gratia, die syne der Mensch gegeben / durch solche deformit des diminuirens nit benommen / sondern von meniglichen jedes Wort vnd Sententia eigentlich verstanden werde : Ist hoch nothig / das alle Cantores oder Sanger von Jugend auff in vocc & pronunciatione articulata sich fleißig vben / vnd dieselbige ihnen bekant machen.

Wie aber vnd welcher Gestalt dieses gesehehen / vnd einer nach der jetzt : Nemen Italianischen Manier / zur guten Art im singen sich gewohnen / die Accentus vnd affectus exprimirn, auch die Trillen, Gruppen vnd andre coloraturen, Am süßlichsten vnd bequemsten adhibiren könne : daffelbige sol in einem absonderlichen Trattatlein (Wozu Mir denn sonderlich der Giulio Romano sonsten Giulio Caccini de Roma genant / in seiner Lenouue Musiche, vnd Gio: Battista Bovicelli dienslich gewesen) in kurzen mit Göttlicher hülfte herfür kommen.

Zu einer lieblichen / rechten vnd schönen Art zu singen / gebören / wie auch zu allen andern Künsten / dreyerley : Als nemlich / Natura, Ars seu Doctrina, & Exercitatio.

I. NATV-

### Das IX. Capitel.

Instructio pro Symphoniacis

**Wie die Knaben / so vor andern sonderbare Lust vnd Liebe zum Singen tragen / off jetzige Italianische Manier zu informiren / vnd zu vnterrichten seyn.**

**S**o leicht wie eines Oratoris Ampe ist / nicht allein eine Oration mit schönen annuierigen lebhaftigen Worten / vnd herrlichen Figuris zu zieren / sondern auch recht zu pronunciren, vnd die affectus zu mouiren : In dem er bald die Stimmen erhebet / bald sinden lesset / bald mit mächtiger vnd sanfter / bald mit gantzer vnd voller Stimme redet : Also ist eines Musicians nicht als sein singen / sondern künstlich vnd annuierig singen : Damit das Herz der Zuhörer gerühret / vnd die affectus bewegt werden / vnd also der Gesang seine Endschafft / dazu er gemacht / vnd dahin er gerichtet / erreichen möge. Dann ein Sanger muß nicht allein mit einer herrlichen Stimme von Natur / sondern auch mit gutem Verstande / vnd vollkommener Wissenschaft der Music, begabet vnd erfahren seyn : Das er wisse die Accentus fein artlich vnd cum Iudicio zu führen / vnd die modulos oder Coloraturen (so von den Italis Passaggi genomet werden) nicht an einem jeden Ort des Gesanges / sondern apposite, zu rechter zeit vnd gewisser maß anzubringen vnd zu appliciren, damit neben der Lieblichkeit der Stimmen / auch die Kunst wol eingekommen vnd gehört werde. Eintermal die jenigen gar nicht zu loben / welche von Gott vnd der Natur / mit einer sonderbarsten lieblichen bitterten vnd schwebenden oder bebenden

Sf 3

## 1. N A T U R A.

Erstlich muß ein Sanger eine Stimme haben: In welcher drey Requilita vnd drey vicia zu merken.

Die Requilita sind diese: daß ein Sanger erstlich eine schone stichliche zittern= vnd bebende Stimme (doch nicht also/ wie etliche in Schulen gewohnet seyn / sondern mit besonderer moderation) vnd einen glatten runden Hals zu diminuiren habe: Zum Andern/ einen strecken langen Aethem/ohn viel respiriren. halten konnen: Zum dritten auch eine Stimme als Cantum, Altum oder Tenor &c. erwehlen/ welche er mit vollem vnd hellem laut/ ohne Falsetten / Das ist habe vnd erzwungene Stimme) halten konne.

Vnd hierbey sind/Intonatio vnd Exclamatio zu merken.

## I N T O N A T I O.

Intonatio ist/ wie ein Gesang anzufangen: Vnd sind davon unterschiedliche Meinungen. Etliche wollen/daß er in dem rechten Thon/ etliche in der Secunda vnter dem rechten Thon/ doch daß man allgemach mit der Stimme steige/vnd dieselbe erhebe: Etliche in der Tertia: Etliche in der Quarta: Etliche mit annuheriger vnd gedempfter Stimme anzufangen sey / welche unterschiedene Arten meistens vnter dem Namen Accentus begriffen werden.

## E X C L A M A T I O.

Exclamatio ist das rechte Mittel die affectus zu moviren, so mit erhebung der Stimme geschehen muß: Vnd kan in allen Minimis v. d Semiminimis mit dem Punct / Descendendo angebracht vnd gebraucht werden. Vnd moviret sonderlich die folgende Nota, so etwas geschwinde fortgehet/ mehr affectus, als die Scimitation, welche in erhebung vnd verringering der Stimme ohn Exclamatio mehr stadt findet / auch bessere gratiam hat. Welches in vorgedachtem Tractat außfuhrlich vnd mit Extempeln declarirt werden sol.

Die

Die vicia in der Stimme / sind: daß etliche mit vielen respiriren vnd Aethem schopffen: etliche durch die Nasen vnd mit vnterhaltung der Stimme im Halse: etliche mit zusamen gebissenen Zee men singen. Welches alles nicht wol zu loben sehet / sondern die Harmony deformiret vnd annuhtig machet.

Vnd hißhiesher von der Natura: folget die Doctrina.

## 2. D O C T R I N A.

Furs ander muß ein Sanger rechte Wissenschafte haben / die Diminutiones (so sonst in gemein Coloraturen genennet werden) stichlich vnd A ppositiv zu formiren.

Diminutio aber ist/wenn eine grossere Nota in viel andere geschwinde vnd kleinere Noten resoluiret vnd gebrochen wird. Dieser sind nun unterschiedliche Arten vnd Modi: Deren etliche Gradatim nacheinander folgende/geschehen: als/ Accentus, Tremulo, Gruppi vnd Tirata.

Accentus ist:

Wenn die Noten folgender Gestalt im Halse gezogen werden.

N. B. Die zweygeschwungene Note / darunter 3. geschneet / besdeuet daß sie dreygeschwungene seyn soll/ deren 32. vff einen Tact gehoren.

Exempla:

233.

Exempla:

Nota initialis & finalis in Vnifono.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a sequence of notes: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4. The first and last notes are marked with a 'P' (piano) dynamic.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a triplet of notes: G4, A4, B4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Per Secundam Ascendendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows an ascending second interval: G4, A4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Descendendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a descending second interval: A4, G4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Per Quintam

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a fifth interval: G4, C5. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Descendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a descending fifth interval: C5, G4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Gg Per

234.

Per Tertiam ascendendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows an ascending third interval: G4, B4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Descendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a descending third interval: B4, G4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Per Quartam ascendendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows an ascending fourth interval: G4, C5. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Descendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a descending fourth interval: C5, G4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Per Quintam ascendendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows an ascending fifth interval: G4, C5. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Descendo.

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a descending fifth interval: C5, G4. The first note is marked with a 'P' dynamic.

Tremolo

A musical staff with a treble clef and a flat key signature. It shows a tremolo effect on a note, indicated by a wavy line. The first note is marked with a 'P' dynamic.

235.

Tremolo, vel

Tremulo: Ist nichts anders / als ein Sitteln der Stimme oder einer Noten: die Organisten nennen es Mordanten oder Moderanten.

Tremulus Ascendens.

Dieser Tremulo ist nicht so gutt als der Ascendens.

Tremolletti.

3 3 3 3

3 3 3 3

Und dieses ist mehr vff Orgeln und Instrumenta pennata gebräuch / als vff Menschenen Stimmen.

Gg 2

Gruppen

236.

Gruppo: vel

Gruppi: Werden in den Cadentis und Clausulis formalibus gebraucht / und müssen schärffer als die Tremoli angeschlagen werden.

3 3 3 3 3 3 3

3 3 3 3 3 3 3

Tirata:

Sind lange geschwinde Läufflin / so gradatim gemacht werden / und durchs Clavier hinauff oder herunter lauffen.

2 3 3 3 3 3 3

2 3 3 3 3 3 3

Je geschwinde und schärffer nun diese Läufflein gemacht werden / doch also das man ein solche Noten recht rein hören und fast vernemen kan: Je besser und anmüßiger es sich wird.

Die

237.

Die Diminutions, so nicht gradatum fortgesetzt / sind  
Trillo vnd Passaggi.

Trillo:

Es zweyerley: Der eine geschieht in Vnisono, entweder auff  
einer Linie oder im Spatio; Wann viel geschwinde Noten nacheinander  
repetiret werden.

Vnd dieser Art sind im Clau-  
dio de Monte verde außfunde.

Der Ander Trillo ist vff unterschiedene Arten gericht. Vnd ob  
twar einen Trillorecht in formiren, vnmüglich ist außm vorgeschriebnen zu lernen/ es  
sey dann / das es viva Praeceptoris voce & ope geschhe / vnd einem vorgelungen vnd  
vorgemacht werde/ damit es einer vom andern gleich wie ein Vogel vom andern obler-  
viren lerne. Dahero Ich auch noch zur zeit/ außser vorgedachtem Giulio Caccini, in  
seinem Italienischem Autore dieser Art Trillen beschriben/ sondern allein vber die No-  
ten, so mit einem Trill formiret werden sollen/ ein t: oder tr: obertr: obersgesetzt besin-  
de: Jedoch hab ich etliche Arten alhier obiter mit beyzusagen nötig erachtet / damit die  
noch zur zeit vnwissende Tyrones, nur in etwas sehen vnd wissen mögen was obngeschr  
ein Trillo genennet werde.

Es 3

238.

Grup-

240.

Passaggi.

Sind geschwinde Klüffe/ welche beydes Gradatim vnd auch Saltatim durch alle Intervalla, so wol aiscendendo als descendendo, vber den Noten so etwas gelien/gesetzet vnd gemacht werden.

Sind sind zweyerley Art: Erstliche sind einfache/ so mit Minimis oder SemiMinimis, oder Minimis vnd SemiMinimis zu gleich formirt werden: Erstliche sind trebrochene/ so aus Fuis oder Semifuis, oder Fuis vnd Semifuis zugleich gemacht werden. (Die SemiMinimas werden von den Italis Chromata; die Fuis aber SemiChromata: Die Semifuis, Bichromata genennet.)

Anfahret Schülter aber dieser Kunst/ sollen Erstlich bey den einfachesigen vnd einfachesigen Passaggen den anfang nehmen / vnd hernacher gemachtam in den trebrochenen/ mit Fuis geschickten sich fleißig exerciren vnd eben/ bis sie endlich an die mit SemiFuis geschickten / vnd dieselbe zu wege bringen köhnen.

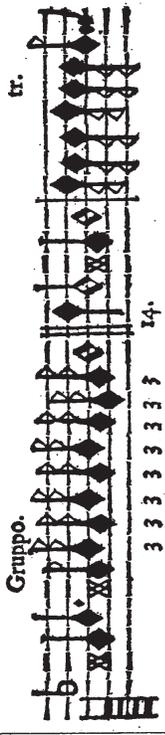
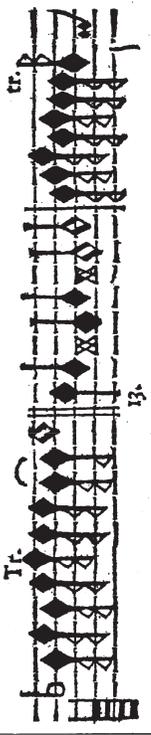
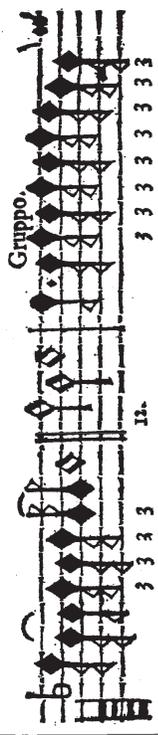
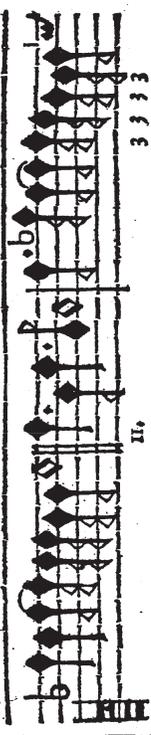
3. EXERCITATIO.

Damit man aber dieses/ was bisher künlich beschreyet worden/ desto besser einnemten köhne / so muß solches mit allerley vnd vielen Exempeln auff mancherley Art diminuiret (do denn der modus Diminutionum darvber geschickter vnd man sich darvalla zu diminuiren vnd coloriren) demonstret werden. Weil aber solches in weitersitzig vnd in diesem Tomo nicht kan begriffen werden: So wolle der wohlmeinende Musicus vnd Cantor hiezu so lang vorlich nemen/ bis der sonderliche außsührliche Tractat in Praeceptis vnd Exempis, mit Ehrlicher hülf in Irung von mir an den Tag gebracht werde. Dohin ich den gützerigen vnd nach solcher neuen Art zu singen begreiften Musicum wil remittiret vnd gewiesen habu/x. Interdè valeat & vivat, meq; fovete & amare pergat benevolus ac sincerus Musicus; cui ego pro viribus fideliter in-servire studeo & aveo, dum vivo?

Micael Pratorius Cr.

£nglich

339.



Passaggi.